

船場とはどんなまち？

写真は『今日からあなたも船場人』（船場倶楽部、2021年2月）というガイドブック。大阪・船場という地域に興味がある。まずは「船場とはどんなまち？」から。

船場は、北は土佐堀川、東は東横堀川、南は旧長堀川（現長堀通）、西は旧西横堀川（現阪神高速道路）に囲まれた南北2.1km、東西1.1kmの約230haの区域をいいます。港から、大阪城に向かって、船場のまちは東西の「通り」を軸として発展、これに南北の「筋」が交わる格子状のまちがつけられ、今もまち割りが残っています。



明治以降、堺筋や御堂筋等の整備により、人の流れは南北の「筋」が中心となりました。通りや筋の沿道には、現在も数多くの近代建築はじめ歴史的な建物が残り、まちの変化を見ることができます。

船場は、豊臣秀吉による大坂城築城に合わせ、西側の砂洲の埋め立てで生まれたまちです。大坂夏の陣、明治維新、太平洋戦争と、船場は幾度も壊滅的な被害を受けますが、その度に新たな人びとを惹きつけて蘇り、かつての伝統と融合して新しい時代の船場の魅力を創りだしてきました。

江戸幕府直轄地後、さらに埋め立ては拡大され、船場は水運の拠点となり、全国から人と富と情報を集積、大坂が城下町から経済都市に変容します。船場は金融・薬・繊維・輸入雑貨など多くの問屋が繁栄します。（写真は増脩改正撰州大阪地図、1806年、文化3年、●は大坂三郷の北組、▶は南組）

この間、近松門左衛門に代表される文芸・芸能をはじめ、多くの町人学者を輩出した懐徳堂など、なにわ商人の誇りある町人文化が育まれ、継承されました。

明治維新により、大阪の経済的基盤は壊滅的打撃を受けますが、その後急速に工業都市化し発展。大正期には「大大阪」と呼ばれる時代を迎え、モダンで最新の都市文化スタイルを創造しています。戦後の復興を支えてきた船場も、1970年代からの繊維不況や産業構造の変化で、かつての賑わいを失っていきました。戦前には約6万人あった人口も、一時約4千人まで減りましたが、2015年以降、約1万人を超えるまでに回復してきました。昼間は約20万人が集中する業務都心に変わりありませんが、商業・業務機能の中心がキタとミナミへ集中するなかで、新しい都心船場の魅力が生まれつつあります。



(2021年4月25日)